

## 著書と題名

橋本 清

私と大平君とは半世紀を超える長い付き合いではあったが、彼が役人や政治家の表通りを歩いて人生の山頂を極めたのに対して、私は循環器の故障で中道で第一線を退いたから、公的な交渉はほとんどなかった。また私は絵を画き、彼はゴルフを楽しんだから、趣味の面でも二人は喰い違っていた。従って私は公人の側面で彼の行動に接触したことはほとんどない。ここ十年來の付き合いは彼が私邸で解放された夜の歓談の面だけであった。

元來彼は口が重く行動も慎重で、奇言奇行のできる人間ではなかったから、いわゆるエピソードは少ない。常に真面目で誠実で人生の破目を外したことがない人間ということが、彼のエピソードであるといった方がいいてあろう。私と彼とは性格に大きな相違はないと書いたことがあるが、やはり陰陽正負の大差があったといえるかもしれない。彼は寡黙で慎重で受動的な待ちの性格、私は多弁でセツカチで能動的で踏み出す性格、彼は地味で控え目で謙虚、私は派出好みで、出しゃばりで尊大、それでいて何十年も交友が続いたから不思議である。

夜の議論でも彼が「お前は過激すぎる」、「お前は理想主義的すぎる」、「やたらに動いてもできる時がこなれば成功はしない」といい、私が「君は慎重すぎる」、「君は現実主義的すぎる」、「動かなければ何ができるか」といった調子のやりとりはしょっちゅうあったが、後の気持はいつも爽快であった。私はよく引き合いに出すが、私はルソー的であり彼はヒューム的であった。二人の比較にこの偉大な世紀の大思想家を持ち出すのは誠に非礼で厚顔な話である。しかしルソーとヒュームは十八世紀の全く同年間に生きて、前者は主知主義的で理論から実

際を造らうとし、後者は経験主義的で實際に対して理論の筋を通そうとして、全く相反する立場をとったことが面白いので、これをわれわれの関係に借景しただけのことである。学生時代からの変化をみると、昔は彼がルソンの「私」がヒューム的であつたが、社会生活が長くなるに従つて彼は役人や政治家の経験を通じて次第に現実主義的、合理主義的になり、私は責任のある地位から退いて次第に理想主義的になつて行つた。それぞれの置かれた環境の変化のせいである。しかし「何々主義的」といつたところでわれわれは学者や思想家でないから体系的にある種のパラダイムに属するというような話ではなく、いわば一つの感觸程度のものである。例えば経済論では、当初は二人とも抽象的、演繹的な方法で一般普遍の理論と政策を考えた古典学派が好きであつたが、後年の彼は古典派の自由主義原理には賛成しながら絶対的、普遍的方法を廃して経済論に歴史的な特性を認めようとしたドイツ歴史学派や、制度的、文化的環境に限定を求める米國制度学派に近い考えを持つていたようにも思う。

ところで本稿では、彼の回想から少々毛色を変えて、彼の本の題名について述べることにしよう。初めの頃の彼の著書の『春風秋雨』は平凡すぎるではないかとひやかしたら、次回とその次の出版に際して漢字四文字の題名を考えてくれという注文があつた。この二回の著作を通じてまとめて述べると、漢代の作者不明の古詩から「失火青煙」を、韓愈の「盆池」から「池光天影」を作り、他に控えとして「非老養拙」(典拠白居易)、「散人芥考」(莊子)、「巨暮雜俎」(莊子)、「風塵懷想」(土井晚翠)他数題を作り、また最後の二言を啼語、雜譜、蕪考等で組み合せた数題を加えたが、私の推す最後の二題は派手すぎるし、他の数題は卑下しすぎたり弄語すぎたりということ、結局彼が組み合せて『巨暮芥考』、『風塵雜俎』の題名となつた。彼らしい中庸の選択である。

私は「池光天影」が宏池会の名にも少々似通つており、彼の次の著作にこの名をつけたかつた。しかし新著を出す前に彼は去つた。もう永遠に歸つてこない。「曉星正に寥落」、限りなく淋しい。

(高松高商同級生)